Challenge

No.3

呉市立蒲刈中学校
第２学年通信
令和４年４月１８日

国枝慎吾さんから学ぶ！

４月１１日（月）の道徳の授業では，車椅子テニスで活躍する国枝慎吾さんの生き方から「内なる自分に恥じない，誇りある生き方，夢や希望など喜びのある生き方」について考えました。

国枝さんは９歳の時，脊髄腫瘍による下半身麻痺のため車いすの生活となりました。母親の薦めで小学校６年生の時に車椅子テニスを始めます。そして高校１年生の時に，オランダで車椅子テニスで生計を立てている選手の存在を知り，プロを目指すことになります。現在，天才的な強さを持つ国枝さんですが，最初から強かった訳ではありません。メンタルの弱さが課題だった国枝さんに，全豪オープンの期間中，選手用レストランで「俺は最強だ！」と叫ぶことを命じたメンタルトレーナーのクインさん。そのアドバイスによって自分を信じて行動が変わった国枝さんは，2006 年アジア人初の世界ランキング１位となりました。2010 年９月，車椅子テニス初のシングルス 100 連勝達成。2021 年東京パラリンピックに出場し，日本選手団主将として挑んだ５回目の五輪男子シングルスでは，シングルス３つ目の金メダルを獲得しました。（2004 年アテネ五輪男子ダブルス金メダル獲得）その後，2022 年全豪オープンで同大会 11 回目の優勝を果たしています。

メンタル強化のため，2006 年より３年から４年もの間，毎朝「オレは最強だ!」と鏡に向かって叫んだ。当初は半信半疑だったが，それを続けるうちに，「サーブを打つ時に『もしかしたらダブルフォルトしちゃうかな』と考えてしまうんですが，ラケットに刻んだ『オレは最強だ!』のフレーズを見て口に出すと，そういう弱気がパッとなくなるんです」と効果に気付いたという。今でもラケットに『オレは最強だ!』のシールを貼っている。（国枝さん談より）

【学んだこと　ー　みんなの意見　―】

・弱さを受けとめて，その弱さと戦うことです。私にも弱いところはあるので，弱さに勝てるように努力したいと思いました。
・どんなに実力があっても，メンタルや気持ちが弱く，自信がなかったら勝てないこともあるのだなと思いました。私もメンタルを強くしていきたいです。
・自分の弱さを知ることの大切さや，自分に自信を持つことの大切さを学びました。国枝さんは，自信をつけたあと，自分の弱さを強さに変えていったからです。私も自信を持ち，たくさんのことに挑戦していきたいです。
・国枝さんは，メンタルが弱いことが弱点だったけれど，それを克服して目標を達成し，新たな目標にも挑戦しているのがすごいなと思った。
・国枝さんのすごさは，できなかったことを周りの人や環境のせいにしていないところだと思います。私はテニスで負けたときなど，国枝さんのように周りのせいにしないよう意識していきたいです。
・国枝さんから，自分と戦うことが大切だと学びました。失敗すると八つ当たりするのではなく，自分が弱い，自分のせいと自覚して成長につなげていきたいです。

（＊生活記録には「僕」と書いていても，すべて「私」と表現しています。）

令和の怪物 佐々木朗希投手
最年少完全試合
13 連続Ｋ達成

　プロ野球ロッテの佐々木朗希投手が，4 月 10 日のオリックス戦（ZOZO マリンスタジアム）で，走者を１人も出さない完全試合を，20 歳５ヶ月の史上最年少で達成した。1994 年５月に記録した槇原寛己（巨人）以来となる，28 年ぶり 16 人目（16 度目）の快挙。プロ通算５勝目を初完投の完全試合で飾った。

　佐々木投手は，この試合でプロ新記録の 13 者連続奪三振も樹立し，27 年ぶりに１試合最多奪三振 19 のプロ野球記録にも並んだ。

　岩手・大船渡高３年だった 2019 年春に，時速 163 キロを計測して注目された。19 年秋のドラフト会議では４球団が１位指名で競合し，ロッテに入団。２年目だった 21 年は，プロ初を含む３勝（２敗）だった。　〔朝日新聞４月 12 日　スポーツ面〕

「完」の文字にはもともと，凱旋の意味合いがあるらしい。戦いに勝ち，戦死せずに帰ったことを祖先に報告する儀式を示していると，漢字学者の白川静が解説している。最後まで成し遂げる，まっとうするという意味につながった。

　歴史的な凱旋報告，いやヒーローインタビューに立ったのはロッテの佐々木朗希投手だった。プロ野球で 28 年ぶりに，走者を一人も出さない完全試合を達成した。受け答えは控えめで「打たれたらそれでいいかなと思って」捕手を信じて投げたという。

　体をめいっぱい使った躍動的なフォームで放たれる 160 キロ台の速球に，猛者（もさ）たちのバットが空（くう）を切る。相手チームのファンも拍手を送るしかなかろう。高校時代に怪物といわれた 20 歳は，すでに大怪物の趣である。

　しかし怪物時代の彼は甲子園に出ていない。地方大会の決勝で連投を避けるため監督が投げさせなかった。こんな逸材（いつざい）を間違っても潰すわけにはいかないと考えたのだろう。その判断に野球好きの賛否は分かれたが，今は支持する人が多いのではないか。

　学生時代に無理をさせるのは当然で，その先に大選手への道がある。そんな根性論が多くのスポーツで幅をきかせた時代があった。しかし活躍した選手たちの裏には，無理がたたり，道半ばで倒れた人が数多くいたに違いない。

　佐々木投手がそのリードを信じた松川虎生（こう）捕手は，高卒１年目の 18 歳である。楽しみなのは２人ともまだまだ伸びる若者で，完成も完熟もしていないことだ。　〔朝日新聞４月 12 日　天声人語〕

「佐々木」の名を多くの人が知ったのは岩手・大船渡高時代です。夏の甲子園出場が見えた地方大会決勝で，監督は連投となる佐々木投手の起用を見送り，大船渡は敗れました。当時，監督を支持する意見がある一方，「高校球児たちは，甲子園を目指して日夜厳しい練習に励んでいる。勝てる見込みがあるのに，本人が登板を望んでいるのに，監督がそれをしないのはいかがなものか」という意見もありました。発達途上の高校生に無理を強い，故障させてはいけない。佐々木頼みのチームであってはならない。監督は苦汁（くじゅう）の決断をせざるを得なかったと思います。

佐々木投手の活躍ぶりを見ると，高校野球チームの勝利は大事なことですが，個人を，選手の将来まで見据えた監督の判断は素晴らしいと思えます。私たちは往々にして，目先のことだけで判断しがちです。しかし，「物事の本質」を捉えると，目先のことだけで全て片付けられることばかりではありませんね。

先週の家庭訪問では，お子さんのご家庭での様子等，お話をうかがうことができありがとうございました。